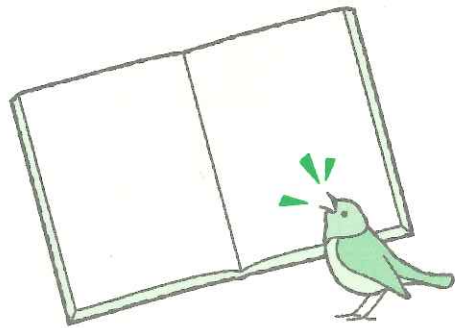


書いて学ぶ  
親鸞のくじば

お手本  
を  
なぞって

和  
讃



## 「和讃」とは

和讃わさだとは、仏教讃歌ぶつこうかの一つで和語による讃歌です。親鸞聖人しんらんしやうじんは、主著『教行信証』きやうぎやうしんしやうをはじめとして漢文や和文による著作を記されていますが、人びとが仏教の教えを唱和しながらやさしくふれることができるよう、この和語の讃歌である和讃を数多く製作されました。「正信偈」しやうしんげとともに、真宗門徒まんとが朝夕のお勤めに用いている、親鸞聖人のおことばの中でも、もつとも親しまれているお聖教しやうきやうの一つです。

和讃は、教えを身近に讃嘆さんたんする詩であり、親鸞聖人の聞法生活もんぽうがその製作の現場であったのでしよう。念仏に、經典に、七高僧しちこうそうの教えに日々学ばれた親鸞聖人の聞法の営みが率直に親しみやすく表現されている。それが和讃なのです。

### 本書の使用にあたって

本書は、親鸞聖人のおことばに直接ふれ、学んでいただくことを目的としています。

各頁は、和讃本文と、語注、現代語訳からなります。まず、語注と現代語訳を参考にしつつ、本文の意味を確認しましょう。そして、意味を考えながら、ペンまたは鉛筆で、本文をなぞります。

書き終えたらぜひ声に出して読んでみましょう。一首ずつを何度も丁寧に読んでみたり、また、和讃は六首でひとまとまりになっていますので、ぜひ続けても読んでみてください。はじめて仏教の教えにふれる方は、ことばの難しさにとまどいます。しかし、本文を何度も声に出してゆっくり読むことで、きっと親鸞聖人のお心にであっていくことができると思います。

なお、本文は、『真宗大谷派勸行集』まんとおほやうはいつけんぎゆしゆ（赤本）所載の和讃四十八首を用い、表記は『真宗聖典』まんとしやうしやうでん（ともに東本願寺出版部発行）に拠っています。

彌陀成仏のこのかたは  
いまに十劫をへたまえり  
法身の光輪きわもなく  
世の盲冥をてらすなり

現代語訳

阿彌陀仏が仏と成られてから、いまにいたるまで、量りしれない時をへておられます。そのさとりはなの身から放たれる光は世界の隅々まで行きわたり、この世に生きる、智慧なく闇に迷う私たちを照らし続けています。

語句の意味

彌陀 阿彌陀仏のこと。阿彌陀は梵語アミターユス(無量の寿)、アミターバ(無量の光)の音訳語。意味をとって、無量寿仏とも、無量光仏ともいいます。

成仏 仏梵語ブツダ目覚めた者に成ること。

十劫 劫は古代インドにおける時間の単位で、きわめて長い時間を表します。その長さは、四〇里(現在の中国の単位で二〇キロメートル)四方の石をすべて百年ごとに一度ずつ薄い衣でなでて、石がすべて摩滅してしまいう時間よりも長い時間であるなどとされます。

法身 仏の本質は、姿形を超えた法であることから法身といいます。

光輪 光は、迷いの闇を照らすさとりの智慧を表します。迷いを破るさまを車輪が万物を踏みまくるのたとえて光輪といっています。

盲冥

仏の本質は、姿形を超えた法であることから法身といいます。

光輪

光は、迷いの闇を照らすさとりの智慧を表します。迷いを破るさまを車輪が万物を踏みまくるのたとえて光輪といっています。

智慧の光明はかりなし  
有量の諸相ことごとく  
光暁かぶらぬものはなし  
眞実明に帰命せよ

現代語訳

仏の智慧の光明は量りなく無限にひろがり、この世の有限なるものはすべてことごとく照らされ、太陽の光によって夜の闇が破られるようであります。眞実の智慧の明かりを放つ阿彌陀仏をたのみとしなさい。

語句の意味

有量の諸相 有量は、量り知ることができるものこと。世間にあるすべてのものをいいます。ここでは、特にあらゆる生きとし生けるもののこと。

光暁

仏の光が迷いの暗闇を照らし破るのを、暁に太陽の光が夜の闇を照らし破るのたとえます。

眞実明

阿彌陀仏のこと。眞実の智慧の明かりをもって人びとを救うことを表します。

語句の意味

解脱

あらゆる煩惱の束縛から解き放たれること。さとりのこと。

かぶる

蒙る。身に受ける。

有無

有の見(見解)と無の見のこと。存在や死後について、有る(存在する)という見解や逆に無い(存在しない)という見解は、仏教では、どちらも事物の真実の姿を知らない誤った見解とされます。

平等覚

阿弥陀仏のこと。あらゆる存在が平等であるという真理を覚り、平等の慈悲をもって、人びとを救うことを表します。

解脱げだつの光輪こうりんきわもなし

光触こうそくかぶるものはみな

有無うむをはなるとのべたまう

平等覚びやうどうかくに帰命きみょうせよ

現代語訳

一切の煩惱を滅するさとり徳から放たれた光は、際もなくどこまでもひろがります。その光に触れた者は、誰もが、有る・無いという思いにとらわれるあり方を離れると釈尊はお説きになっています。あらゆる存在の平等を覚られた阿弥陀仏をたのみとしなさい。

光雲こううん無碍むげ如虚空にょこくう

一切いっさいの有碍うげにさわりなし

光沢こうたくかぶらぬものぞなき

難思議なんしぎを帰命きみょうせよ

現代語訳

阿弥陀仏の光明は、雲が天空を自由にわたっていくように、人びとのあらゆる煩惱をさまたげとしません。光明に照らされ智慧をいだかないものは誰もいません。私たちの思いはからいを超えた仏をたのみとしなさい。

語句の意味

光雲

阿弥陀仏の光明がどこまでも人びとを照らすこと。雲が虚空(天空)を行きわたっていくのに、何の障壁しょうへきもないことにたとえます。

一切の有碍

あらゆる障壁となるもの。

光沢

光明のつややかなるおいのこと。雨に大地がうるおい、草木の芽が生じるように、光明が照らし、智慧の芽が生じることを表します。

難思議

阿弥陀仏のこと。「思い議はかることが難しい」の意で、光明の徳が広大であることを表します。